

# 語りによる「回復」：AA のミーティングから

志田卓

## 1 背景と目的

日本は高度経済成長期を経て、医療技術の発展を遂げた。しかし、近年増えつつある慢性病は病院での対処がしにくく、患者に対して有効なケアができないことも多い。そこで注目されているのが、セルフ・ヘルプ・グループ (self-help group, 以下 SHG) と呼ばれる健康問題や障害を持つ当事者のグループである。アルコール問題に関しても SHG の果たす役割は大きく、その理由について野口 (1996) はアルコール依存からの「回復」のためには断酒の継続が不可欠で、そのためには断酒の継続を同じく志向する仲間との恒常的な相互作用が有効だからと述べている (野口, 1996, p.52)。

ここで、アルコール依存症者の目指す「回復」について考えてみる。一般に病気から「回復した」という時、それは「治癒」と近い意味で用いられることが多い。しかし、葛西 (2007) は、アルコール依存は「治癒はなく、回復がある」病気といわれ、数十年間断酒をしていたとしても一口飲めば元通りの状態になるという (葛西, 2007, p.10)。つまり、アルコール依存症者にとっての「回復」とは、酒を飲まずに一日一日を過ごし、飲まない生き方を見つけていくことにある。

こうした「回復」を支えているグループが、SHG の原点となった「アルコホーリクス・アノニマス」(Alcoholics Anonymous, 以下 AA) というアルコール依存症者の SHG である。葛西 (2007) によれば、AA は 1935 年にアメリカで誕生して以来世界各国に広まり、1996 年時点では 148 カ国で 200 万人以上のメンバーがいると推計されている (葛西, 2007, p.185)。AA の最も基本的な活動が地域で定期的に行われるミーティングであり、ここはアルコール依存症者である参加者が集まって自らの体験談や考えを述べる場となっている。本稿の目的は、AA のミーティングにおけるアルコール依存症者の語りの場が、どのように「回復」を支えているのかを明らかにすることである。ここでは要約という形で、論文の一部を紹介していく。

## 2 調査概要

平野 (1995) は、日本におけるミーティング会場は全国各地に存在し、その数は 1993 年の時点でおおよそ 600 であると述べている (平野, 1995, p.30)。そのうちの 6 つのミーティング会場が青森県にあり、そのひとつである A 市のミーティング会場を調査地とした。A 市のミーティング会場は毎週 1 回、特定の曜日・時間に、公共施設の一室でミーティングが開かれており、ミーティ

ングが中止あるいは休みになることはほとんどない。対象の会場は日によって異なるがおよそ10名以下のメンバーが集い、参加者が少ない時は1時間、多い時は2時間ほどミーティングが行われる。

調査方法については、実際のミーティングに参加し参加者の発言内容をその場でメモするという形をとっている。音声を録音するという方法を取っていないのは、AAのミーティングが匿名性尊重の観点から録音による会話の記録を許可していないためである。また、アルコール問題を抱える人々の心中には大きな悩みや精神的苦痛があると考えられるために、対象者への質問はAAで用いられる用語の意味やAAの活動などグループ全体に関するものだけにとどまっている。

調査日として、2009年5月第4週、7月第1週、7月第2週、7月第3週、7月第5週、8月第4週、8月第5週、9月第1週、9月第2週、9月第3週の特定の曜日<sup>1</sup>におけるミーティングに参加し、合計10日間の調査（順に①～⑩とする）で6人の参加者（A～Fとする）から話を聞くことができた。

### 3 AAミーティングの機能

発言内容の整理については、全調査期間におけるミーティング内での発言を内容ごとに短くまとめKJ法<sup>2</sup>を用いて分類するという平野（1995）の調査を参考にした。発言を内容ごとに分類したものの総数は246で、それらを大きく分けると「自己を捉え直す」（95）、「メンバーにとってのミーティング」（105）、「その他」（46）の3つに分けられた。それぞれの内容から考えられたAAの機能について簡単にまとめると、以下のようになる。AAのミーティングという語りの場合は、自己紹介が強要されないという「匿名性」と、誰かが話している間は質問や反論をしないという「言いつばなし・聞きつばなし」という2つの特徴を持つ。匿名であることは「自分もアルコール依存症者の1人であること」を受け入れやすい状況を作り出し、その中でメンバーにアルコールに関して無力であることを方向付ける。そして、「言いつばなし・聞きつばなし」という形でそれぞれの体験を共有することで、自らを振り返り「今日1日を生きる」といった新たな価値を見出していく。

### 4 「共有」の問題

---

<sup>1</sup> ここで何月何日とはっきり述べていないのは、インフォーマントが特定されるのを防ぐためである。青森県内にある6つのミーティング会場は毎週それぞれ違う曜日にミーティングを開催しているため、調査日時が分かれば簡単に場所が特定される。参加者が比較的少ない分、場所が特定されると人物も特定されやすいのでこのように表記した。

<sup>2</sup> カードに書かれた事項の親近性に基づきグループ化し、概念化する方法。

先行研究と調査結果を比較する形で AA ミーティングの機能を考察する中で、1つ疑問が残った。それは、「体験的な知識を共有または伝達すること」である。これはよく先行研究において SHG を説明する際に用いられる言葉であるが、何をもって体験が共有されたと言えるのだろうか。発言内容を見ると、「飲んでいる（最中の）アル中は自分がいい人だと思っているんですよ」「アル中の人は格好付けたがるような人が多いんです」といったように、「アルコール依存は〇〇」という一般化された内容の発言が多く見られた。このような一般化された言い方は、自分の体験のことを言っているのか、他人の体験あるいは見聞きした情報のことを言っているのか判然としない。体験の所在が曖昧な状況で体験が共有されたと言えるのかどうかという疑問点について、考察の一部を紹介する。

ミーティング参加者が語る時、それは単に情報や体験的な知識を提供するという側面だけではない。参加者の発話行為は自らの物語を語るという側面も持っている。こうした見方をすると、参加者の語りにはある一定のパターンが見えてくる。それは、「後進する語り—前進する語り」という構図である。ガーゲン（Gergen,1999）によると、「後進する語り」は失敗や損失といったネガティブな出来事を収束ポイント（説明されるべき出来事や到達すべき・避けるべき事態など語りにおけるゴール）としてそれが説明されるように進んでいく語りであり、「前進する語り」とは成功や勝利といったポジティブな出来事を収束ポイントとするものである（Gergen,1999,pp.103-104）。AA ミーティングの例で言うと、「アルコールに依存する自分」を収束ポイントとする「後進する語り」と「アルコールに依存していない自分」を収束ポイントとする「前進する語り」がある。

こうした「後進する語り—前進する語り」が顕著に現れているのが、調査日④における E の語りである。E は普段宮城県の AA に参加しているが、時折東北各地の AA のミーティング会場をまわっている人物である。そのため、今回調査した 10 日間のうち参加は 1 日だけだったものの、ミーティングで話をするには慣れていると考えられる。この点も例に挙げた理由である。

この日、E の話は「最初は梅酒の梅をかじる程度だったんだけど、高校を卒業する頃には立派なのんべえでした」といった学生時代に酒を飲み始めたということから始まり、当時の自分の年齢を述べた上で「どうやって実家のある場所まで帰ったのか覚えていなくて、一緒にいた人、家族も当時の状況を教えてくれないのでよっぼどひどい状況だったんだと思います」「5 日ほど寝たままで、離脱の苦しみを知らずに済みました」など、急性アルコール中毒や離脱症状<sup>3</sup>を起こした話をした。ここで、「アルコールに依存する自分」という「後進する語り」が語られている。その後、E の話は「AA に参加することをどういう風にしむか考えることが、酒を止めることに繋

---

<sup>3</sup> 飲酒中止後、幻覚や痙攣といった発作を起こす症状。

がっていると思います」という言葉で締めくくられ、ここで「アルコールに依存していない自分」という「前進する語り」が語られている。

この例を見ると、語りの最初に急性アルコール中毒や離脱症状を起こしたという「後進する語り」を話すことで、続く「前進する語り」を際立たせているという印象を受ける。この点に関して伊藤（2000）は、物語の迫真性によって特定の自己（酒を飲まない自分）を卓越したものとして自分自身に対して見せ、その物語を人生航路上の様々な場面で出来事の理解や行動の制御の基準たらしめようとするのが、SHG 活動の基本的な特性であるとした（伊藤,2000,p.95）。つまり、参加者はミーティングで「アルコールに依存していない自分」という卓越した自己を迫真的に語ることで、日々の生活の中でも卓越した自己を維持しようと意識の前面に押し出し断酒を実行しているということである。「体験を共有する」という疑問点について、共有が目指されているのは話の内容ではなく、「後進する語り—前進する語り」という語りの形式だと考えられる。このような「依存していた自分」から「依存していない自分」へ向かう語りはある種の「良い話」という基準を獲得し、物語を活性化させる。物語としての発話行為は実際に体験的な知識を共有・伝達しているというよりも、共通の形式を持った話をしたり聞いたりすることを通して語りの場における一体感を維持していると言える。

#### 参考文献（要約部分のみ）

- 伊藤智樹 2000 「セルフヘルプ・グループと個人の物語」 日本社会学会編 『社会学評論 51 巻 1 号』 有斐閣
- 葛西健太 2007 『断酒が作り出す共同性—アルコール依存からの回復を目指す人々』 世界思想社
- 野口裕二 1996 『アルコールリズムの社会学：アディクションと近代』 日本評論社
- 平野かよ子 1995 『セルフ・ヘルプ・グループによる回復—アルコール依存症を例として—』 川島書店

Kenneth Gergen,1999,*An invitation to social construction*,Sage Publications of London

(=ケネス・ガーゲン著 東村知子訳 2004 『あなたへの社会構成主義』 ナカニシヤ出版)